

## P-037

### 初めての避難訓練による救急病棟看護師の意識の変化

京都第二赤十字病院 看護師部

○荒木 香代、村上 佳奈、中村いつ子、坪倉 有岐、小川智恵美

はじめに 救命救急病棟であるA病棟では開設以来病棟内での避難訓練が実施されたことがなかった。今回、火災時の院内防災マニュアルの周知と院内火災時の役割行動の理解を目的とした訓練を実施した。初めての訓練で看護師の意識がどのように変化したかを報告する。

1. 目的 A病棟における避難訓練により病棟看護師の意識がどのように変化したかを明らかにする。  
2. 方法  
1) 期間：2016年2月～4月  
2) 対象：A病棟看護師31名  
3) 方法 机上訓練、実訓練を実施。前後で防災に対する意識調査をアンケート形式で行った。  
3. 倫理的配慮 対象者には、アンケートの提出は自由であること、研究に使用すること、提出しないことにより不利益が生じないことを説明した。  
4. 結果 実施前後で全員が病棟での避難訓練は定期的に必要なであると回答した。自由記載には不安・恐怖・パニックがあった。訓練実施後は不安の軽減と不安の増強の相反する記載があった。実施後は問題点として具体的な内容の記載があった。  
5. 考察 訓練の必要性は病棟看護師全員が感じていたが、防災マニュアルを読んだことがない看護師が多かった。今回の訓練により火災時の役割行動がイメージ化された。そのことで不安は相反する結果となったが新たな疑問が生じた結果であり、避難時の問題点が具体的に挙げられたのは問題意識が高まったためと考えられる。  
6. 結論  
1) 病棟看護師は以前より避難訓練の必要性を感じていた。  
2) 不安が軽減する者と増強する者がいた。  
3) 火災時の避難に関する問題意識が高まった。  
終わりに 今回の訓練で災害に対する意識は高まった。これを機会に防災マニュアルの周知徹底と定期的な訓練の実施に努めていきたい。

## P-039

### 実働型シミュレーションを取り入れた災害研修～看護係長会3年間の取り組み～

高槻赤十字病院 看護師部

○井上 尚代、藤原 和子、福谷 裕美、森下かおり、原田 香織、花田季代子

【はじめに】当院の災害研修は院内災害訓練・新人研修・赤十字概論・救急法等があるが、発災時の対応は自部署の力量に委ねられあまり行われていない現状であった。看護係長会（以後係長とする）では発災時に行動できる看護師を育成する事を目的として、平成25年に災害研修チームを立ち上げた。この3年間の活動を報告する。  
【倫理的配慮】各研修後のアンケート結果は個人が特定されないよう処理した。  
【活動報告】平成25年は発災後10分間の行動を既存のアクションカード（以下ACとする）を用いて机上シミュレーション(以下SLとする)を行った。その結果ACは改訂の必要性があると感じ、平成26年にACの改訂と実働型SLを取り入れた研修を計画した。平成27年は新しいACの周知と係長が自ら受講者の評価者となり、行動が振り返れるよう評価表を作成した。また研修前に係長がSLを実体験する機会をもった。研修では同じ内容をあえて2回行った。そして2回目に移る前に係長が評価表を基に、受講者と一緒に行動を振り返った。繰り返し行う事で臨場感をもって動く事ができ、全員が「行動できた」と評価した。研修後課題では各病棟でもSLが行えるよう係長がSL準備を支援し全病棟で実施した。その結果、3割の病棟看護師がSLを体験した。体験した看護師の8割が「行動できた」と評価し、自己評価・他者評価共に「行動できた」という回答が2回目は上昇した。  
【考察】研修のなかで振り返り繰り返し実働型SLを取り入れる研修は発災時の行動ができるようになることと考える。評価方法、研修準備に時間を要し3割の病棟看護師しか体験することができなかった。今後もACを使用した実働型SLを取り入れながら、自ら行動できる看護師を育成していく事が課題である。

## P-041

### 東日本大震災を沿岸で被災した看護師が日常に戻ったと自認した時期とその理由

日本赤十字北海道看護大学 看護学校

○河原田榮子、吉谷 優子、寺島 泰子

【目的】東日本大震災で被災した看護師の体験から、被災後日常に戻ったと自認した時期とその理由を明らかにする。  
【方法】東北沿岸部の看護師1人を対象に作成したインタビューガイドを用い2015年5月に半構成的面接を行った。録音データを逐語録とし分類した。本研究はB大学研究倫理委員会の承認を得、JSPS科研費26670933の助成を受けて実施した。  
【結果】被災時50歳台後半女性。看護師経験36年中、18年は看護管理職。当時は療養型病院のスタッフ、独身で一人暮らし。  
A氏の「仕事、生活や家庭、体調、感情、気持ちについて、日常に戻ったと自認した時期」とその理由を示す。  
被災時は自動。津波がきたので、重症者を上の階へ移した。夕方まで1階外來の物を階上に夢中で上げた。医師が重症者の家族に2～3時間で死亡するかもしれないと説明した。重症者の痰吸引とオムツ交換をした。11日は吸引に追われ、おやつ1個と牛乳だけ。食料調達に出かけた12～13日、店は荒らされ、探すとアイスクリームがあり流動食代わりにした。14日に救援物資がきた。7日目の18日に兄と姪が自転車で「おばちゃん死んだかも」とって、A氏の生存を確かに、病院を訪問。7日後より自宅から、通常車で5分のところを徒歩40分で通勤した。  
3月11日の勤務者が1週間看護した。その後家族の安否確認をして2～3日で仕事に戻っていた。通常勤務に戻れたのは1週間後ぐらいから。病院の2～5階で病院診療を再開した。1階の改築は震災から4ヶ月の18日に完了。この頃A氏は日常を取り戻した。  
眠るために飲酒量が増え、落ちていた酒を拾って飲んだ。震災直前に重要他者の自救を体験しよう生きていけないと思ったが、震災に遭ったおかげで、私ができることはまだあると、仕事に没頭した。  
【考察】震災直前の死別体験の方が重大であった。

## P-038

### 救急病棟におけるアクションカードを用いた避難訓練の実施と今回の課題

京都第二赤十字病院 看護師部

○村上 佳奈、荒木 香代、中村いつこ、坪倉 有岐、小川智恵美

はじめに 本院では定期的に訓練を実施しているが救急病棟（以下A病棟）では訓練を実施したことがなかった。そこで、A病棟でアクションカードを用いて訓練を実施した。アクションカードをが実際の避難時に有用か検証し活用できるものを設置したいと考えた。  
1. 目的 A病棟における避難時のアクションカードの有用性について検討する。  
2. 方法 1) 期間：2016年2月～4月 2) 対象：A病棟看護師 3) 方法 訓練前にアクションカードを作成し病棟看護師へ配布した。机上訓練2回実施後実施訓練を1回実施した。訓練終了後に意見交換を行った。  
3. 結果 机上訓練ではアクションカードを読み合わせた。実施後アクションカードは役立つとの意見が多数あった。実訓練では初期消火・リーダーはアクションカードに沿った行動がとれた。患者避難はアクションカードを見ず忘れていた項目があった。実施後の意見交換ではアクションカードは必要であるが意識づけとリーダーの役割行動の内容について再検討が必要であるとの意見が出た。  
4. 考察 机上訓練では役割行動が明確となったためアクションカードは有用であった。実訓練ではアクションカードが活用されていない場面もあったが、役割行動を把握していたためであると考ええる。確実に避難するためにはアクションカードのような行動指示が必要である。ただし詳細を記載するのは困難であるため、項目が意味する内容の共有が必要である。内容については他関連部署を踏まえての訓練も実施し検討する必要がある。  
5. 結論 アクションカードはA病棟の避難には有用であると思われる。今後、他関連部署を踏まえての訓練実施とアクションカードの内容の検討が課題である。

## P-040

### 東日本大震災を被災した看護教員が日常に戻ったと自認した時期と遷延の理由

日本赤十字北海道看護大学 看護学校

○河原田榮子、吉谷 優子、寺島 泰子

【目的】東日本大震災で被災した看護専任教員の体験から、被災後ほぼ日常に戻ったと自認した時期と遷延の理由を明らかにする。  
【方法】東北沿岸部の看護専任教員3人を対象に作成したインタビューガイドを用い2015年5月に半構成的面接を行った。録音データを逐語録とし分類した。本研究はD大学研究倫理委員会の承認を得、JSPS科研費26670933の助成を受けて実施した。  
【結果】被災時40～50歳台の女性3名が語った「仕事、生活や家庭、体調、感情、気持ちについて、日常に戻ったと自認した時期」と遷延の理由を示す。当時3人とも同じ会議中、約90人の看護学生がいたが全員山の手のE学校に無事避難できた。F学校に間借りし1年過ごし、2～3年目はプレハブの仮校舎、4年目に新校舎に引っ越した。  
A氏は教員12年目。非日常は4年弱続いた。理由は、自宅が半壊、夫が失職、遠方の子らが故郷を気遣い帰省し同居し一時、昔のような多人数家族になれたこと、学校が引っ越しを繰り返し新校舎になり、子どもらが再就職し、震災前と同じ子ども一人と夫の3人暮らしに戻るのに、4年弱かかった。  
B氏は教員2年目。独身。猫2匹と自宅のアパートは無事。非日常は3ヶ月続いた。理由は、4～5月は学校全壊のため閉校、6月にF学校で間借りて再開するまで学校存続が否か等の連日の会議で疲労困憊。この3ヶ月中は独身の女親友が同居したことで話せたことと、まだ責任が少なく、気が楽だった。  
C氏は教員2年目。夫と2人暮らし。夫は仕事を解雇され無職のまま。非日常は2年続いた。理由は、体調の変化が激しく、アドレナリンが出て、気分の浮き沈みがあり、業務上被災体験を見聞きし泣く同僚を見るのが嫌いで前に進みかかったので、3年目に1年休職し進学した。  
【考察】3名とも遷延したが、理由は家族の影響が大きかったと考える。

## P-042

### 災害訓練に患者役で参加した学生の思い

石巻赤十字看護専門学校 看護学校

○安倍 藤子

【はじめに】A校では、設置主体病院の災害研修センターにおける研修を活用して、看護学生がよりリアルに災害を体験し、災害看護に対する興味・関心を促そうと考えている。平成27年度に2回の災害訓練に患者役として参加した効果をまとめた。  
【目的】患者役で参加した看護学生が感じた思いを明らかにする。  
【方法】対象者 平成27年度A校3年生37名災害訓練（設置主体病院大規模災害訓練と県DMAT訓練）に患者役（家族その他の被災者役含む）で参加後、「参加は意味があるか」「一番の収穫は何か」「参加後の看護に対する気持ちの変化」「今後も訓練に参加したいか」を自由記載させた。記載内容をカテゴリー化し比較分析した。  
【倫理的配慮】アンケート提出をもって学会等の発表の了解を得た。  
【結果】「参加は意味があるか」は、「ある」33名で、「理由は患者の放置される不安や気持ちを感じた（20名）、患者の思いや救護者の思いを客観的に考えることができる（5名）」等であった。「ない」3名の理由は、患者役で参加していないのでわからない、待ち時間が長く無駄な時間が多い等であった。「一番の収穫は何か」は、患者の気持ちを理解できた（9名）、救護班の動きや連携や受け入れから搬送までの流れがわかった（5名）等であった。「参加後の看護に対する気持ちの変化」は、どんな場面でも患者の気持ちを考え行動したい（6名）、忙しい中でも声掛けひとつが患者の状態を左右するため看護師の存在は大きい（5名）等であった。「今後も訓練に参加したいか」は、「はい」24名で、理由は震災時に自信をもって動けるようになりたい（6名）などであった。「いいえ」10名の理由は、2回やったからもういい等であった。  
【結論】学生は2回の災害訓練に患者役として参加し、第1に患者の思いを実感し次は救護者として実践したい思いがあることがわかった。